夢想兵衛胡蝶物語前編

八

# 夢想兵衛胡蝶物語巻之四

東都　曲亭馬琴戯編

## 強飲國

強飲國ハ酒をのみ食をくらひ飯を食ふの代野夫ら笑ハ併を食ふものを贅家ら卑ものゝ茶を喫ど甘きを好ど松魚ゝらの初声をせくとゝハ布子を脱しゝ差刀をもそ〻ぬ吹や唄へのゝ二上ゝよ浮ゝとゝ財布をゝ頓けゝ牙上の根抜を踏抜く。こゝ〻りゝ酒の泉いくゝらゝ溢ゝて意ゝ借金の渕となる。玉の觴ハひすゝく乾のゞて内損の茱壺とゝるゝされば酒ハ百茱の長ゝるゝとゝのゝ。玉ゝ瓦ゝ瓦ゝ万病の半ゝる長ゝん熱抜の呂を混ぜゝ。盗人上戸とゝゝゝゝゝゝゝ古人の三友ゝ酒をゝゝ琴書と一坐ゝゝ琴ゝハ耳を楽ゝ。書ゝハ目代ゝゝ。酒ゝハ口を楽ゝ

子の文は一尺の席料を論ずべしてれ雑炊のあるうち佐く小人の文は三文が智恵嚢を敲て八文の醴より否るう酒はたうらのけれども同よなべどといふ冷好も亦一介と呼ばるるも更よ料理あるべしよう。東坡は酒蓋を掃帚とし。梵さは呼ぶるを飯若湯といふ。されば味酒の三倫のむ。枝葉建る又六が門を極楽と定め。終よ此牙を〻〻と綴る辞世は呉志よ似ることあるとの人。青州の従事とは腹臍よ至るの謎。真一先生とは三が一の隠語。彼飲中の八仙歌ふも李白は渚白の唐名よあらん。萬葉の十三首よ大伴酔て子ども考る。一盃は人酒を飲ミ二盃は酒酒を飲ミ三盃は酒人を飲む声を知して泣上戸よる。泣ども罵る腹立上戸。笑上戸よ捻上戸。呑ずいを乗る門の掃除よ間酒拾得。五徳を叩て小鍋ど端婦



だいのめる。足下のるるは上戸の癖ありくて七癖めるとは。堪情る人男山風味元来高しとはいども。顛逸ナど登るとるく。ヒッ梅の一本生その香は鼻と穿つとも。下戸の為ハ閑りどとく。酒よ目のる人も又酔ぬ前の杖をるいビ飲とは蝋よ似て。坐の長うんとは沢庵。さとは蜂よ似て。味ひ蜜のごとしいふ果林酒池の荷の盃り。精底の澱よ深ぶ小科もとはるるよ克さは大礼もこれをとりて醉人べ。ちくべ酔ど乱まざるを。真の酒宴といふべけまど。強欲国の習俗るれば。ひづまも酔て飽とは沢庵。生平ハ柔和忍辱ふる。仏と唱ま一ものも。酔ば忽ち悪鬼のごく。口も言数多くなる。日来ハ慎し述懐も。酔と分まとはいてのけ。氣恥のとも忘れ。ものるのく繰りうつ天を窺ハ管をゆく。結加跌坐けー偏祖右肩。彼百目のげつ石。ハ反吐一ッよ吐ちし眼を瞪ー。肘を張り。涎を流ー。三を空ー。一歩は高。

一歩ハ低く。跟く蹤くとして。歌ふるなよなよ。罵りおつちゃらうろうろ。
よろよろ。合てちろうろうの。勘定も著て。懐中の物を遺し。両足
閾へ躓込でハ。汁粉を食ひ。著のぞく。酔ふまてハ石を枕とし。醒て流は
嗽げども。塵まぶまて隠君子ハ仙どそのHの活業もこれが為ハ懈
怠。火急の要用も。こまが為ハ廃しておれ一室ハ宮ゑれべつぐ家の走馬燈
ハと疑ひ惑ひ。ゑそれ燈火ハ野ひても。火頭ちつつの〳〵万燈のごく。筆を採
バ曲がふく。褄穿べ足がふらぐまふん年つゝもつて。釈子のさ一食紙繰べ。
小娘をちつて大声ハ揚させ。婆さハ戯まて。眼前恥〳〵まふ〳〵ひぐ巻ロ
羽目ハ柵を画き。低く高ハ鼻唄。その臭いまぐ夾ふ〳〵初献ハ慇懃ふ〳〵
三献ハ恨〳〵九献の生酔本性ハ〳〵。ちふ硯蓋をあじて。鼻紙ハ裹む粹
草の切刻ハ秩の濡ふ紙厭ハ〳〵。焼物の鯛ハ一分も大化ふふ必ひてけ。

の果子ハ甘紀を嫌へども辞ぜど。盃のふ〳〵ハ農苒の話ふ〳〵ひ〳〵く。未吐の
下戸ハ胡越の忘ひをすて蹂〳〵。既ハ酒ふ〳〵肴ふ〳〵。肴あれどもふの肉紀ど。これ
ハ倍ハ三絃をふつて。二絃あれ〳〵ふ〳〵。弾ど。これハ倍ハ端婦をふつて。普
の朗詠小謡ハ変〳〵。小謡ハふつて流れ唄の鼻唄をふつて巻とふる。一穴ふる紙
釣瓶茶屋を中ハ空鉄炮。汚虫ハ口合のおりふい吐の俳諧ひも。ふりハ振で
餡餅とふふつて嗅〳〵。元ハ叱ふふ。夫婦喧嘩も夜半ふ発。打ち泣ち笑ハ
ち。宵一宵四隣を騒〳〵も。夜前ハ大ふ給酔ふて。前後忘却気の毒
千万。ふれ造他ハ石ハ。勧解ハ〳〵人もふ〳〵び怒ど。生酔の女房ハ生酔
熟て。ふ抱ひ。お寺の納豆ふ。ふ〳〵。蘇ふを勝ふ〳〵。双物をふふあげ。
茶碗をかく〳〵。懲言ハ〳〵も。罵て。茶ふふる塩茶ぐ。つハ硬ふれ。ハ〳〵ハ瓶の落
ふるぐ。頭痛徘巻ハ青ざめ。朝日ふまふ〳〵。二日酔。毎日ハ酒屋の勘定ハ。

今までは胸につかへしまゝ口さみしきまゝ友促しくぐりの手合迎酒もがめへち。ようやく小半合から一升二升三升の小瓶徳利も浅いはきれいのみにして五升樽ゟとこうのあまりの酒亭主つめつて雪の朝月の夕に花曇り。白く並べて飲よがり。おける居酒屋の床几に腰をうちねかし。紅葉かへその湯豆腐も穴のあいたる秋かな。銭つかみるもべしよろしるも跡へ手付り間酒と夜の声に好すく。郷で敲く鴨の骨。吹けべき泪涙つゝまぜ煮にはあらで女房を口説おとして。又質をもつて借して四百通用の蒲團をまげて肘枕。弟しくはその中にありされば。これのみ茶毒濃によつて酔てうまくも寐られ飲ぬ妻子は柏餅と名づくる小丸寐して腹にも満ど夜や寒死衣や薄死に女の稍火鉢さへ抱よする。炭さ團の天窓敲くなどうちの泣く子どもをりふせん。只前の世で瓢簞をむくゝむくひ報ひなく。亦今生は飲を働きと生れ来つて酒屋の為に薪こなら

とは志らぬ夫の料簡。下戸の建る庫もなし。それともありや有ぶ走り。酒酣を待ぬ山ひとつはいへぬんなる月。神にも造酒のそろへ物。火宅の煩脳うち流さん。気ちがひ水の徳なりと我意地なって聴納もしぬ。男は男と器量。女の酔とは有まじく。膝から崩れて持崩を。横筋違にあくて切り。酔がまはつて高笑ひ踊る内儀は久しい女とど壁にひくや三絃の糸手がさらり又足が。さらりと文句に三下り。猿の猿もねらひ虫を娘一揃揃ひ八盃。不義淫奔の媒は。酒の咎ともしるものなれども。この国の常なれば地黄坊揃吹か。水鳥記にも某手して。只飲を以友とし交り。膿血にあつまる蝿の如く。据ざまにどもその香を知る。初對面からうちとけて。理ない願もつのでうごく。御馳走酒の涎湧笑ひ塞ぎまで飲ず理る酒。めぐりくて身におぼえ碎る割膝も。果は酒毒の浮腫となり。吐血内損卒中風にて忽地ころり

山椒味噌。つまり肴で立飲に。冥土の迎ひうくるとも。ちろりも持ずて送る。無常の風に吹れてハ。おのれ浮世の酔醒し。泡影夢幻の水盃一口呑ものゝあハれ。終の薪に間陶も砕けて後ハ舊の土。日来ハ嫌ひし強飯で。人を養ふとふがくしきもすこおそろしくに惜いるといはず。揔回向何までも南無阿弥檀那寺の。和尚の長い引導をもちかねてたや逃支度挑ある穂の着到も。残る人ハ涙の泣よりあく鯛のめを煮を舐りめんし。水魚竹馬の飲仲間も。死でハ骨を捨てくれど。世に斂難で死るなら斂の字つくる例ハあれど。酒で死でハ戒名に。酒の字をつけられ揺ハかりけれど孰とうれるけれど北郊の雲鳥部の煙新葬墓とうり土饅頭。下戸かとされバ上戸の墓かりける程に夢想兵衛ハ酒旗町の二丁目。蛇の子屋飲太郎とい旅籠宿に逗留してこのかたの形勢に與さめて。つくと思ふやう。生ハ人の楽む不死



ハ人の甚ろし所。嗜慾の為にその死を忘る人は酒を殊んでく命を縮ると知るハ双を倒にして物を追ふに異ならねど。鮭毒や砒霜のごとく立地に殺がえねバ死るねつつりで大酒しそうもたし。死ねかの馬し然し飲めず酒ハ薬なく飲めハ毒となるも又酒なれバ。その過さざる養生をもる者ありて。その養生ハ獨酌にありなど上戸と志まるバ人の許さもと死に至れ飲酒も。度をすごせバ身にあたる。文選枚乗が上書にも。泰山之霤穿石。殫極之統断幹。水非石之鑽。索非木之鋸。漸靡使之然也といひしごとく。山より落る霤も。絶ずうつて終ハ巌石へ穴をあけ。車井戸の釣瓶索も。絶まず久しければ竟に幹を断が如く。酒ハ人の命を削る。漸ふ人めらねども飲みて久しけれバ五臓を破る酒を飲をけづるといふも。この因縁とまふれども。凡酒飲國の人の腹の内ハ酒を好虫が生て鯨鯢の潮を吸ふごとく。ヒタ〳〵綿ての酒を吸入て脾胃のうちに納る限が

のまど酒たくさんの禍なり。一斗も二斗も飲まんに。彼虫の所為なり。さて人の腹中に九つの虫あり。伏虫といひ白虫といひ肺虫といひ胃虫といひ。蟯虫といひ赤虫といひ蟯虫といひ。鬼虫といひ。又尸虫あり。この虫人と共に胎内に生じ。又寸白虫あり。以上十一種或は白虫は酒を好むといへども。この虫ども。腹中にあり。上の旬は巳上に向ひ。中の旬は中に向ひ。下の旬は下に向ひ。この虫共に絶滅するなり。月の初四五日の間。五更の時に用ひ。ゑんば数あり。昔扁鵲の弟子に扁知己といふ数医あり。酒毒の人を教ふ。毒を抜て用ひ。旬に馬の血を飲ませ。或は蜀水花を酒に浸し。殊に大酒の人に与へて。彼酒を飲ませば。その人玄地に入り下戸となりて。亦酒塩をも飲ず。その人酒を飲ずして元気弱き喜べい。物忘れして愚蠢となりぬ。人是を見て云ふ。その身に于て却て酒を飲ずして角を伐て牛を教へ。枝を繋て樹を持に異なるべし。されば酒代削

客を正せ。聖人も。乱酒の病は禁じ給ひ。酒を好ばとりく飲むべし。酒は老に益ある。べきなり。上戸は奈良漬を食ず。下戸は却糟汁を好む。亦是残なる人は綺羅を好まず。銭を貯へるのは却美服を好まず。取るを捨るは異なるれども。彼も慾なり。これも慾なり。有る者は嗜慾を捨るのは百年の寿命を拾ひ。飲食を省くのは却半生の気力を肥す。人生慾なるものは。のらどり。茶の慾をひそめ。情ほのをを下げ。命ながきのことを忘れ。ことはなきを。糧生は人生長く世に在る。狂はべくば。楽べ水ろ氷とうりて。飛をうるとぶ。その水や雪は。裏表の毎よりうらべ清て旧の水よりうるとといはるのけまを氷室に蔵おけば。夏ぞも清せ。まつりべ氷と雪の糧生は氷室ふのて人の糧生は。嗜慾を省くよりの。この論究めて暖易し。人の性は吾るるのあて莫私于此とのれ。

絵馬を画ておけバ。さらバよ恐れてならうせど。されバ紙鳶大きな眼に預
ておへめの事し。たまく禁酒するものも。ふと破らんと恐怖れて。神仏へ
誓紙どかけるをハ。きんせんの札へ。鳥居を画ておくに斉く。慾を禁る的
なれど。気精せぬ日ハその神仏が目にみえぬハ本に臭ふ不ども。我を忘れて
禁酒を破る。これらハおのが一心の胸前にあることなり。臍の下にあることなり。一生まで
ね頼みなれバ。酒に魂を奪れまする。只博く覧て学く行ひ。古に明によく発く
に通ぜんハ酒を飲ども乱るゝことなく。戯謔すれども謔に似ざるハ病といへども
癲狂せず。好人もこれを避るぞ。狐狸も魅しぬるぞ。国にかゝる人を称して。酒中の
仙とハいふべけれど。強飲国の奴すら。酒に呑れて乱酔し。狭危を醸すのみ。
鳴呼おそるべし。慎むべしと。痛く説きけれども情なや。その生酔のするなれバ。
真実にとめずくものなく。今一言いふときハ。横そつぽうを挙ぐるげうりぬ。面

魂ぞうと睨つけて。又莞然と笑ひ。お身さな野夫をいふものぞ。謡曲と香の物
でハ酒が飲めぬと。古人錦考もいはれたるが。況て生ながら引導をさく
きらぬやうな陳紛漢ハ。とちらに酔が醒る。三百が鹿朶を買ハしめん。さら
ハ志らぬやうな理屈をのべて。さらりぞ忘れてしまうものゝ。奈良茶屋の煮豆
でへあらめ。堅といふても大槩があるものぞ。賢人でも云ふん人でも。貪着ハせぬ。
潔く受て一盃飲つし。いやといふものあらバ数ならず出ろと罵る
声ハ百千の霹靂に異ならず。愛太兵衛ハその勢ひに辟易して傍杖打
まぬ用心しけよ。ありしがのまゝそれと搔捜がしてさけまど。郷に入ては
郷に従ふ。これも孫の御所ふたつ。あるきハ肩貸て酔漢の杖となり。あるき
あるきハ小間物見世の掃除して。いくつづきに日を送りしバ。そのかいふかも憤りれ
そまんぞ。かくまで廣い強飲国さ。せめてひとりハ醒るものゝ。そのぬけもある

べくもなきものなるべし。されどこのものうるはべ。祝伏せそ。禁酒國を亡べ
べきよ。手ぐ酒を飲りの。酒塩と呉ぐ些たり。生塩をつまみ入れ一盃
ずつ入れるもよしべし。酔ねさめを罪を厭へ後ハ塩も入べそ。禁酒破
まぐ。賓主の礼ぐ。喧嘩買ふハ剛買ふ多く。賣詞ハ買詞の相場
ふ狂ふ。依ハ狂奉幾ぐ酔ぐ高賣ひふ國もあるのと。ふ呉ぐ呆ぐ。
まべ。ふを慰るよりもまるとまを。猿宿を生ず。江潭ぐ吟ふ。三閭大夫
あるねぐ。三里太依ぐ道をいぶべ。案内者を備ふてやべ一の宮詣ぐば。
當國の一宮ハ南山壽星と山田の大蛇をのハ世祭り。左手のぬさふハ劉伯倫
測明李白の禿倉あり。右手のかくふハ儀狄杜康の神社ぬ。斗酒李士
ぶ書齋の蹟。麹生秀才ぶ化物屋敷和田酒盛の大坐敷。稽次ぶ古戦
場。おのく縁起縁故あり。彼案内の阿爺とろ。このもおのべく酒



糟漢ぬく。ひろつく足を踏ぶ。抑ぐよ張りまりぐ。南山壽星ハ
太神。漢土唐の帝のとぐ。人間ぐ出現ぐ。一息ぐ百盃の酒を若ぐ
飲のハ。酒毒のぬつく一夜の中ぐ。天窓忽ち長くなりしぬ。お以顔ぐ象り
て。陶を造りたぬ。相殿ハ山田の大蛇。稲田姫のき気ぐ。食気ぐ
ぬ。陀とぬ。唐の芋ぬハ。ねども。八頭を掉立て。八甕の酒をのぐ。素
盞烏の尊の為ぐ。尻を砕くまのひぐ。酒を買て尻を切ぐ。
世話ハ日本神代の時ぐ。起る。儀狄ハ唐山禹王の子ぐ。ぬ。生弾
を造酒屋。杜康ハ杜車の祝方株。劉伯倫ハ底抜ぬく。陶淵明ハ立弾
先生李白一時四百盃。斗酒学士ハ一斗の酒を。一日も缺ぐ。唐の
玉績ぬ。号ぬく。麹生秀才とぬ。せんぬ。紫伝弟紙弾ぐ。とく。現化
の酒の神。和田酒盛ハ。なれぐ。稽次ハ大塚ぐ。世ぐ。好の医師ぐ。大

師河原の底深と。酒銭の高名掲焉く。十六人の酒の弟子を引つれて此国へ吹流されたりせし神さへとゞろかりもわかちぬ長物語に。憂もて兵衛は退屈してこそれ案内の阿爺を以く。行こと十町あまりかくて天酒山美禄寺といふ大刹あり。大門の額には許葷酒入山門と云へ。戒壇石をふよろさりそ。いと神々しき酒林流るゝ霞酒入まさく。堂塔がらんは一盃飲ねばへさん堂ちんさいめので七面堂。六尺有る五體堂も。内損七斗のからん堂向まぐゆる山へとちよとみさゝ井に四方の赤。池田伊丹の諸白蓮華さうれを年ふ物酒の樽と。一銚づゝに積あげゝる。五重の塔は斂蓑ふて。酬蒸甑堂甍とろのよべし。滅法大酒の浄地なりばわかし薬酒如来の開帳ふて瑠璃壺よりも酒壺と老若男女まのを運び。脂香の善の縁に携る群集は押合へしめひ。合いまや本とおよび盤拔盃の塞銭に銚子のかゝる経文を有がたいとて手とうれ。おがんで此る大盞も。一遍まわり昊宝は。ぞろく左りが利猪まり。まづ一番に中の関白道隆公の鳥の盃出処を問ば大鏡乃巻の六合入り二番は浪に兔の盃和田が酒あり。小林のあさくええても七合入り。さそ三番は碗久がびつくり九八八合入り。四番は乃地黄坊が蜂龍ゆろその一升入り。五番は向菓君ちゝぞ。これ浮瀬のよそりめ。吉野が蟹の盃は。顧太初が杯をよろし。人のまねさる鸚鵡盃飲ねも鸚鵡の盃は張姓李氏がおひつれ。彼李迪之が九品の内。蓬莱盞に海山螺。舜仙螺。艶子卮慢巻荷。金蕉葉に玉蟾児。李宗閔が荷葉盃質にありねど流つ受つ。曲水の觴に潯陽の江楼をそえて月の镜に芦の葉の香口付し握く盃。和漢の昊宝数を尽して。恭しく餝りそ。無礼講中麻上下の。尻肌脱で手拭鉢まき。縁起いひそいつめしく。亦とれ盃のかゝるひ

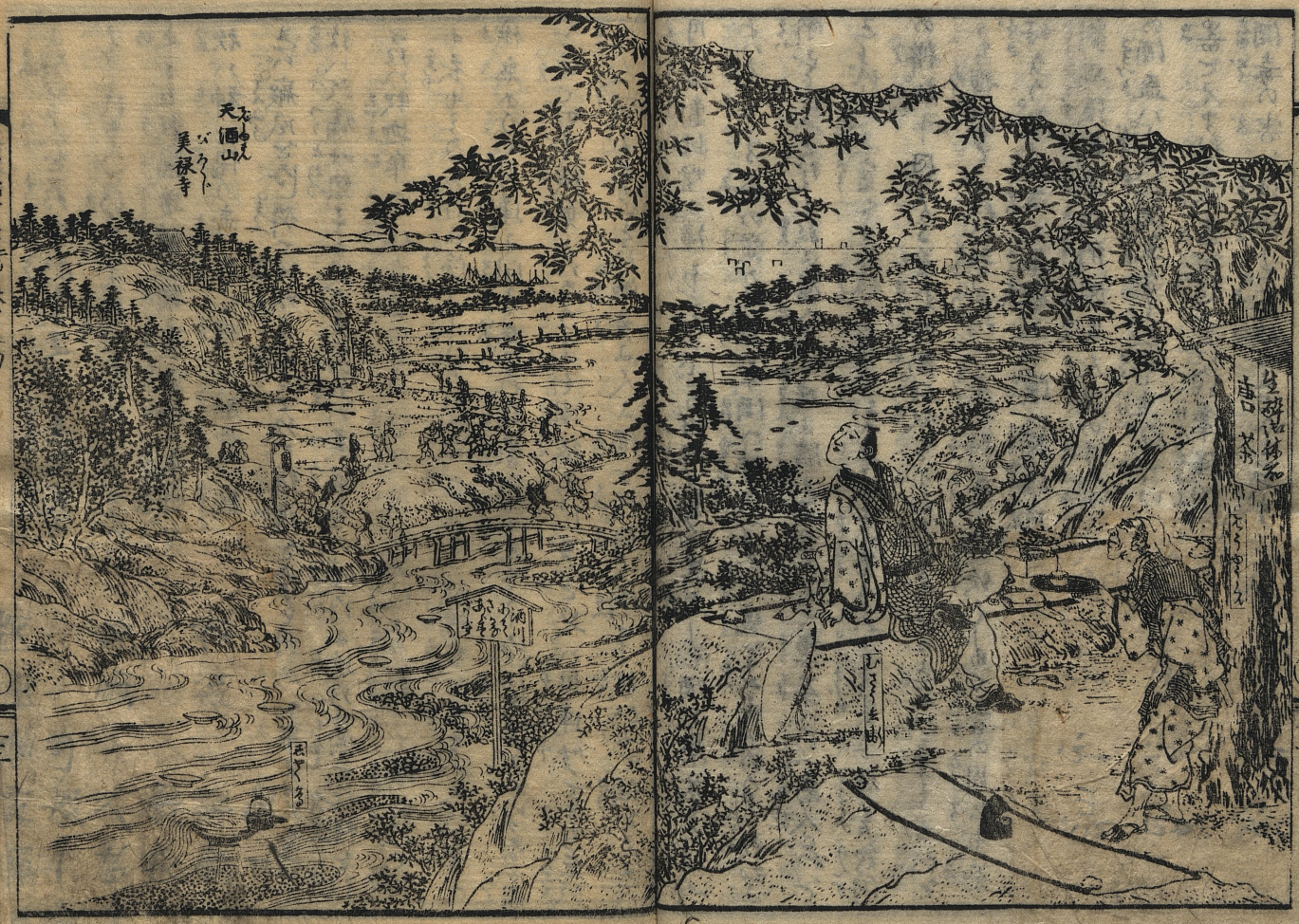
まをぬいふ碎て拜められやうと思ふとも。下戸の爲ハ生有がて。爰
赤兵衛ハ酒臭い辟集の息ハ沢痛がして。ちらく下向ハ赤ーが左ーを見て
も右を見ても。酒屋のうて茶店いろく。人の門ハ鞦を出して。茶碗二ツ四ツ
柄杓を添ふまへ酒と札をつけしハ。六七月炎暑の比のふるまひ水ハ等しけ
れども。のん渇咽喉が乾ても。酒を呑むれいろくハ。天城の山越るとて。水ハ
さくるとて缺く。下戸の爲ハ一十日も暮られぬ國ろり。と咲きるがらこの寺ろ。
境内と出たるのまへ。撐の木とかさどりる。茶店くに紀藩家のて蒼ま
掛る行燈ハ。唐茶の二字を写しれば。爰赤兵衛ハ行くく。通り町で小
便所を見つけるあひをり。ちらくと生るよりて。床几ハ席をかくるを見て。の
の翁さー行る。醫ゆの筒茶碗ハ。ちらくと投で出ると山吹色も好ちく。そるよ
ろ。一口ハ。ぐと飲ば。酒とれんとなり爰赤兵衛ハ半吐ハくと。絞拭ちる。眼
もロもハとりよりて。拔のろちく声ちく唐茶とめれば龍團ろ。雀舌ハと岩ひの外
酒を飲くと人を讃くとる文盲門番奴と。床几を敲て罵りる。

## ○酒茶論

のれ翁れと呼て。呼くとうち笑ひ。客人ちとも。萬物ハ異名ハ。呉名ハ
又雅俗ハ。蘭陵ハ令華の本名。李白が詩と名ハ。蘭陵美酒郫
令香。と賦しるハ。金花酒と。赤蘭生ハ。漢武の酒。煬帝ハ玉薤と。
ちれて。ゼー例ハ。昔ハ醇儒と号し。醴侯と猛り。醴泉侯ハ封ゼハ。唐子西
が骨醫ハ。般若湯ハ和尚の酒。東坡の旨ハ。掃愁帚と
ちてげて。愁を掃ハ玉帚と。ハも。ちろ酒の。俗人れを唐茶とハ。縁
故を。ハ。謝安が煎茶ハ異名ハ。代酒授るとひハ逆ハ。酒
唐茶とハ。酪奴とハ。茶の美名。酪奴ハ茶のうちく。茶と酒の奴僕と

酒をもて茶の君とするも。強飲國の私なれバ。和漢の故なる紙考るに。進雄尊。脚
摩乳。手摩乳に。八醞の酒を造らしめ給へバ。神代の古より酒ハあり。唐山にハ禹
王の時に儀狄が醸るといへど。黄帝の紀既に酒あり。茶を飲ミハ。ことに後
にて類聚國史に弘仁六年。六月壬寅。畿内及近江丹波播磨等に茶を植
させ。毎年に貢を献ると見えたれバ。嵯峨天皇の御時にはじめて貢を植られたる
飲。唐山の史にハ呉志に見えたり。孫浩がとれ荈をもつて酒に換るといふ事あり。
三國以前に茶ハ呑えざ。されバ酒の名目を竊で茶にハ名づける事まゝあり
その二三をいへバ。酒に鵝黄の称あるを取て。煎茶に蟹眼あり。醪酒を如蜜
といへバ。團茶を亦蜜丸といふハあまりに似たるべし。銚子に似せて土瓶を造り。
高脚杯をまねて茶碗を造り。盃臺から茶臺を出来し。酒瓶をまねて茶壺
とすら。酒に肴といへバ。茶に口取といひと叙し。酒をもて茶に比をしず。

月に泥亀挑燈に撞りごとちがへども。世俗ハ多く異名して酒を唐茶とよバ
まいたしざる茶の栄なり。且また酒ハ味天にして七碗をさるそのなく。飲むまゝ
酔ざるといふをなし。故に盧仝が七碗に勝るものとて唐茶といへ客人あるを
さいくして文盲くして抜ちかたなり。おん身にして文盲なれど元実な返答無例
の辨。款手段しげる麦束兵衛。此奴ちよわどさゝぬるおよびなくも訳を
うち摘いぞくされハ故なりぬる附之。茶ハ神農より飲はじめて。魯の周公も茶
好なり。そのうち奇に晏嬰あり。漢ハ楊雄司馬相如。呉にハ韋曜。晋の代に
劉琨張載遠祖納。謝安左思の才人墨客。多茶を飲ざといふをなし。且今
の酒盃ハ。上代の酒盃なりき。元旨なるでいふのこそ。昔の觴をまねても造る酒
器とえずねに茶器を造るといへハ牽强附會の説なり。されバ多く下より来つれバ。
酒毒の害を説諭して茶飲ませんと思へども。皆辨漢なれバ説にしてなく。竊


天酒山
美禄寺
酒川
茶屋

醒る人を易ぬるわるし。是下ハ甚老実なり。醉といへども甚乱ざる。

まゝ〳〵ハ人を殺さるゝ。ゆゑ〳〵ハ酒の害を去てや。本艸綱目巻

之二十五穀の凶造釀の類ハ云。米酒ハ気味。苦甘辛大熱なり。毒あり。久

飲バ神を傷り。寿命を損じ。筋骨を軟げ。気剤を動じ。醉臥して風を受

ゝ。癩風を成。醉て冷水に浴る人ハ。痛痺をなす。丹砂を服する人ハ

飲バ必痛吐熱をなす。又この知ハ美禄寺の境内に近ク因て仏院を

立ハ。釈迦牟尼仏在世の人。安碧陀と云人住上戸酷し。醉狂人て狂

も衣もなく反吐に塗れ。しりけ因縁なく。飲酒戒を立る。又ひとりの

餓鬼あり。同蓮に同く。これ頑愚なるゆゑ。安碧ハいろの罪

を造て。ある餓鬼ハ。因縁なくして。同蓮ハ。安碧ハ。

仏人間にあり。とハ。滅尋人に酒を強て。倒せ報ひ。酒を飲バ

水なり。その水を飲んとすれハ。亦之地に火と変じ。ゆゑ〳〵と云ハ。

学仲に酒を強飲する人を食ずなり。毒餌をなすれ。不仁と

いへ。学れとやいへ。これハ酒に。三十六の失あり。人り酒を飲れハ。この

三十六失を犯さるのゆゑ。仏ハ。〳〵と戒む。酷しゝ至て。天下

を失ひ身を亡さゝ。酒の害なり。息勢張ハ。ゆゑ。客人酒

にちとむろ。科あるゆゑ。酒に大なる徳あるゆゑ。ゆゑ本艸の

主治といへ。米酒ハ茅勢を行し。百邪悪毒の気を殺す。又血脉を

通じ。腸胃を厚し。皮膚を潤し。濕気を散し。憂を消し。怒を発し。言

を宣。意を揚し。義器の説。脾気を養ひ。肝を扶風を除き。気を下さハ。

孟説が説ところ。馬肉桐油の毒を解し。丹石発動諸病を治す。熱しゝ

これを飲バ甚よし。一時珍もの。これハ仏も酒を賞て。甘露の良茅と宣ひ

き。又使斯匿王の未利夫人。飲酒戒を犯せり。世尊これを咎めたまひ。のぶくの犯戒は大切徳を汚すなり。却て是を稱めさるよりて。善薩は酒をもつて人に施さ。佛に捧ぐ。過なしと說のひしも有るなり。四天王の天樂なり。これを名つけて菩酒といふ。阿修羅は四天海をもつて。酒にてこれを飲む。是を名づけて酒といふ。酒は阿修羅の離譯。上は四天王より。下は阿修羅界に至るまで。酒を好まぬ仏もなし。如来涅槃のその中に。酒の徳毀めあるとも。茶の徳は終に聞えず。又六経あるこれを載せず。されば客人ならば國へ来て。酒を飲まず。茶を呑まば。竟舞の代に禁結を銘。宝の山へ入りて。犬の糞を拾ふに異ならず。惜しぬ人なりとも。これが義兵衛は勅状とて。それは大なる僻言。彼七佛師文殊大士は。五臺山に住して学究とする。茶を喫し。玻璃盞子を手に持て南方に向ふの清味なり。小價に茶碗を忘れるなど。富せりを何とも。又鹿苑茶真如茶なり。華嚴の大海衆を興起し。古来仏に茶を進ずれども。酒を供し例はなし。されば仏の教に。茶の徳勝れいべらば。六経に載せず。茶を載せざるは。屈原離騒に梅を載せど。家持の万葉に牡丹の奇なるが如し。禪家に茶を論ずれば。趙州は茶を喫せ。七百の甲子を保ち。風穴は茶を賞して三巡の礼度を匡し。溈山は茶を摘み。體用を覺る。香嚴は茶を点じて好愛を原ね。又南泉は。魯祖歸宗杉山に茶を賛し。洞山は雪峯巖阪欽山の爲に茶を行し。夾山監中の一甌投子飯後の一碗。九夫も是より風雅を志す。茶は加る功徳あり。是でも猶はゞ碍ぐやと。人は笑ひ。酒は第七祖婆須密の。右手に酒壺引抱て。六祖弥遮迦と問答し。婆須密これを法器とし

ゐく。相柔しく今に至る。曇橋例ハ蜀英ゐる。諸方に是を酒曇と
いふ。或ハ芭蕉泉禅師ハ杖に酒瓢ゐけく。山中を往来ゐる。馬祖に
ハ和尚黄檗に。童酒糟ゐる紙ゐるゐ。或ハ曹山自家の酒或ハ青峯
蒲萄の酒色を香を飲むのぞ。ゐる彩併ハ故ゐるゐる。陶淵
明ハ大酔漢。ゐる弟一の達磨と呼ぶ。ゐる紙客人に是を懸る。天下
を失ひ身を亡ぼゐる。ゐる是酒の為ゐるとく。茶を賞るゐるゐねと
いへども養忠兵衛ハ。掌を拍て大きに笑ひ。彼桀紂の両天子ハ。
酒をのゐて天下を失ひ。羲和の二氏ハ酔ふて竟に身を喪ひし。
それ人のゐる所ゐる所就中紂王ハ酒を池と糟を丘と。牛飲の者ハ
ゐるゐ人ハ畜生に異ゐるゐるゐる證据でゐるゐる歟。とゐへば翁ハ臣と
掬ゐ。ゐゐ者ゐゐ。むゐ堯帝酒を飲で千觴を累ゐゐ。その仁ゐ



古の今に溢る。孔子も百盃を引けく。その徳四海の外に流ふ儀狄酒
を醸ゐれば。禹王賞て妙といひ。杜康酒を造りゐれば武帝ゐゐく
憂ゐゐゐを又高宗ハ殷の中興夢に麹糵を求ゐひぬ。亦仁德
帝の治世に曾保利。曾保利といひし兄弟。酒を造るの才ゐゐく
則卿酒を造ゐゐひ酒看郎子の号を賜ひしゐば。子孫酒部を
氏とす。吉野の國栖酒應神に奉ゐ。室山の採花酒復中
に起る酒ハ清ゐゐゐて聖とし。濁をゐて賢といふ。聖賢の道酒に
ゐる。飲の後にハ中酒といふ。辟ハ碑ゐる。碑ゐゐる中ゐる。中庸の道酒に
ゐる。史記に酒の徳を賞て百茱の長といふ。博物志にその功に
ハ王肅張衡。馬均の三人。ゐゐ日ゐゐ霧を把て。山砧をゐく
三ゐゐる。一人ハ絶ゐて飲を食ひ。一人ハ茶を飲ゐ。一人ハ茶を

何にも食せずして山路にさしかゝれば。空腹のあまりに死し。飯を食ふ人ハ病なし。酒を飲ざるものなり。山気の悪邪も犯し得ず健かにて壽なり。彼桀紂ハ色気ちがひ酒の外といひがたし。とそら嘯けバ菱老兵衛ハ扇を翁に与ふる母し。さそくなるさへ故なるづし。生学才のあるものでもめずらしくて解がたし。近く譬ていふ元ハ天地の間に生ずるものハ。人倫と。禽獣と山川と草木なり。就中人倫ハ萬物の霊とされバ人にまさるものなし。茶といふ文字をつけて見よ。艸木の間に人あり。酒といふ字ハ水邊に鳥と書バいとやすく。彼人倫の茶に及ざるといふを翁ハうち消して人にハ貴賤賢愚あり。善人あれバ悪人多し。鳥にも鳳凰あるときハ。禽獣もまた卑しからず。唐の李杜ハ名高き人なれバ水邊の鳥を愛して。用えに二鳥と化し翼天



下を掩ふといへり。又韓朋が妻ハ貞女なり。康王その夫を殺し妻を宮中に納れども従ハず。自殺して夫婦鳥と化し。常に水邊に飛びるなり。茶腹一時。世に強人ハ艸木の間に身を隠す。茶といふ文字ハ水邊の。鳥に不及とあり也と。執龍之しに菱老兵衛ハこたへず声をぞく揚て。麒麟ありの鳳凰しやのと鳥獣が好ましくハいかで呑ふ茶にも又鳳凰團の号ありて。三星と号す。麒麟炭をめくさせ。加之茶器を造るに。金銀珠玉或ハ銅鉄土石をもつてし。又一節の竹細工も。俗者によつて宝とせし。酒器ハ僅に貧乏樽貧乏陶の名を号のこ。及バねるりじやといひくせバ。翁ハ鼻であしらひ。夫酒盃に金銀盃あり。又玉の觴あり。いづれも和漢の宝なるぞや。されバ元日より大晦日まで御酒をそなへて神を祭る。まづ初春ハ屠蘇白散。二月初午の稲

荷祭ハ赤の飯より神酒が賣まし。三月三日の桃花酒ハ。下戸も豆麩
より白酒を賞翫まし。五月五日の菖蒲酒。六月嘉祥の霰酒九月九日
供の菊花酒に至るまで。みな延年の例に酌む。三伏の暑に日も酒を
飲バ暑を忘れ。玄冬の寒き日も。酒を飲バ冷ぞ凍ぞ。茶ハ神棚に
供るのみなく又言暑を凌ぎがたう。なんと一句もでざるまいと競ひ
わかるを茶ようけて神に茶樹の稲荷あまし バ。倉稲魂も茶好なり。
四月八日ハ釋迦の誕生。甘茶を浴せある卯月の利茶神無月の口
切も時にかなへり。薄茶一服喫ときハ。三伏の暑を忘まして。二ふくろ
あり。玄冬の寒き日も。茶粥を啜まし バ汗を流さしかゝる故に本艸に
茶ハ気味甘苦く。微寒にして毒なし。服するときハ瘻瘡なし。小便を利し。
睡を去し疾渇をさり。宿食を消すといへり。古来茶を嗜るものの陸羽



盧仝に携まるハなし。唐山にて茶を賣るもの陸羽が像を竈に並
これを祭りて茶の神とさ。されバ陸羽が茶経に云。木ハ瓜蘆のごとく。
葉ハ梔子のごとく。花ハ白薔薇の如く。子ハ栟櫚のごとく。蔕ハ丁香の
ごとく根ハ胡桃のごとし。その名五ツ。茶といひ檟といひ蔎といひ茗といひ。
荈といふ。天下の名水をえらむこと凡二十ケ処にして傍ていふべからず。大
東ハ足利義満公北山に金閣を造りて鹿苑茶とうし。義政公ハ東
山に銀閣を造りて天下の名器をあつめより。そのうち紹鴎利休が徒
代々数寄者にありしかぞ。是より先建保二年二月四日将軍実朝公
の御病悩。但殊なるなりし。是去夜の沈酔の餘気故に葉上
僧正ハ加持に候ずるの処。このよしを聞良薬と称し。寺より茶一
盞を召進じ。一巻の書を相副てこれを献らる。茶徳を誉るの書にて。

將軍家御感悦あらんとの事。その書に喫茶養生記と題して二巻あり。されば栄上僧正栄西の作る所なり。今茶祖と仰ぎ尊ぶこれ廣雅に所謂茶を飲べ酒を醒し人をして眠ざらしむと云を取まり。且茶は天竺の飲なり。酒は人倫の飲なり。人倫いづくんぞ天竺に及んぞや。西齊詩話に云。壽上の人日本より問。その國に産する所の梅尾山の茶を惠る。詩を賦して之を謝す。その畧に云。幸得梅山信。初嘗日本茶と云。こゝに梅尾山とは。梅尾山の誤なり。梅は和字也。読で止我と也。字書にこれを梅の字なり。木母と云も是梅なり。日の本の茶園をえば。栄西僧正宋より帰る日筑前國背振山に植るを。世に岩上茶と唱へ。その後梅尾の明恵上人栄西の種を乞て。梅尾に植。又宇治に植。近代宇治を第一とす。彼宇治の茶に別稱あり。



子上に別義。極摘宇治の名園七ヶ所を。師の寄て宝治二年。呂利性に栽しかば。りりの井。り文字川。もの山。ふりしの朝日。びなどこそ也。又女房の茶をのめば疾をそつ。熱をさ。癊をのぞく。上気よくする。又洞法師が筑前の岩上茶を師の寄ると。そもそも僧侶の茶は十德あり。五德とかけて茶を喫る人。おの茶は十德のなり。茶は百菜の長なるゆゑと貴ぶべし。客人酒を人倫とこゝ。頓遜國に酒樹あり。その樹の形柘榴に似たり。その花の汁を採て。甕の中に停れば。数日にして酒となる。味美しく世にいへば。酒田又天竺なり。加之天に酒星あり。地に酒泉あり。唐に元正天皇の御宇とよ。美濃國の貧民又孝なり。その又

酒を好むと云ども。他事をもつとめるこゝろなしとある時山に入りて木を伐るに。
醴泉あつて流れ出る。菊を飲びたれ酒あり。飲び尽すと毎日汲て。
家をうるゝ。暮れる又を養ひたれ。その子都に上りて。天皇ふるく
賞をあたへて養老と改元あり。あるは國史に載らるねど。その孝を
世に隠さるゝ。亦茶は酒を醒さとゝいへ。酒飲ぬ人のゝ。酒後に飲茶
は腎を傷る。腰脚重墜して。膀胱冷痛。痰飲水腫消渇を患
ありとは藏器の説。本草をえて是を志す。晉に八賢八達あり。唐
に六逸八仙あり。或は漢家の七十二人。又金谷の二十四友。劉玄石が
一斗日。陶千鬼が七八斗。王績は酒経を著す。劉白倫は酒徳の
頌あり。元次山は三章に隠す。歐陽修は一壺を貯へ。酥酪醍醐を
酒の長。客人酒中の趣を求るに。茶は醉りの禪なり。



袖をうちえらぶ。挂杖を用て竟に求ることなしの人ども。蓋忠岳閣の
この形勢に胸のうちをうなづきねと。歓手のくなるこゝろをなく。
国に此國の人気闊達なれども。短慮にして物あるひとの。怒に棄
に障子を蹴打。皿徒とうら碎き。理非に拘らざるの愚人。
その人のどれも。意地をとりて人の諫を突とも。虚空を
ふりてはとる。須弥とりて舌とす。海を肩を弄ひ。のを大
ふりひるとの。女子と生産に養ひ。夫危邦に入ず。乱邦
に居ずと。かゝる知る。虚こと。長居せんに孟子。とひそう言く。
牙ぶひして走り出。旅宿へも立ず。港口をさして走るとこゝ怒
遠に踊りひて。名もちゝぬ山陰に。はけ入。ゆゆしもの里へ出ず。
はるく遠く左をえらび右をえらび。まども人迹まれる深山の

がるゝよしもあらざりく。御室ならねど楓葉あれバ酒の名ふと
怪しく。又走る事十町あまり。個見れバ山の半腹より。生出る松に震
とりかゝりたる両足を結び着て。ぶらさがりてゐるものあり。近くよりて
是を見るに是人なり。首に縊るゝものにあらねど足括るとハ咄にも
及バず。そや縲断るかと見れバさにハあらで。斧と三拐あして。鼻唄
とうたふ形容。さるからに狂人に異ならねバ。あやしくも又不便におもひて。
抱きおろしつ索を解さす。扶おこしてその故を問バ。その人甚不興し
て。われハ此山の麓なる樵夫なり。強飲国に生れしならず。家貧しく
しきりバ酔ひ人ならねど酒を好み飲ぞ。父も鹿梁と負て里へ出て些の酒
にありつけたれど山風に吹さまされ可惜酒の気もさめん。程の送り
をまたるとよく構より。倒にさがりし飲る酒その勢をたすくる為なり。さする

な御辺ならずとも志らど。かく引おろしまへとぞ。さりとてハ情なり。と
頻ふらして咳ぐ。夢想兵衛呆き果。人その危をバ忘れてハ嗜慾
の害之ぞや。酒を醒さずとて。倒にさがれども。脾胃を害ひ。血を
のぼらさめいつまでか醒ざるべき。よのむかしの素もあるが。又玉の緒
も共に絶ん。これハ日本国の旅人に。夢想兵衛と呼るゝものなり。
浦島仙人の擁護によりて。此年。色慾の二ヶ国を経歴しつゝ、これ
此強飲国に来びて。頻に禁酒をすゝむれども。酔ざまのならぬとハ。
ひとりも教に従ふものなし。郷に義纉寺のなるをくめる老人を
たのみて。茶飲を友ぢちとなくらひしに。彼も又口強馬なる咲入
ども。そもそもが通行ゆねバ。後にこゝを海に浮て。貪婪国へ渡んとて。
港口とさして走るれども途に迷ひて此山路に入りぬ。山人わしこれ

と余の説と必ず違ひが数よ後ひて禁酒し天年を保ち人と言語を
竭して説諭せば樵夫笑ひて冷笑ひ客人他の危を忘れども自の危
を知らざる。今ろ見て樹の枯よりけて酒を醒さずとなる迄見て危
きとなく諫めの眼よその素をえる方。されば人の余ハこの素より
危く。いづれの日何知あり。絶果んも知らざる。かくまで危き玉の絃
をしめて。世ろうの綱をさぐれども。その綱ハ月よりえぬ。ろ紙のて
慾よ耽アこづくり世ろうの綱を端外とする。和漢今昔あり
ど。客人が異国よ推渡りて。ろ紙長を説人の綱を責ろ。
強飲ハ人気あく。怒るとなく常とされば。ようや一巻よ打敷
さうとも。誰が理非を説て。ん可か為よ仇を報ん。亦危うしや夫
酒ハ君子の酒あり。小人の酒あり。茶も亦君子の茶あり。小人の茶



あり。酒ハ天の美禄なり茶ハ地の灵木なり。帝王酒をもて天下を
頤養ひ茶をもて山林の賢者を養ふ。鬼神を祀り福を祈り老を
扶け。飲びて尽さず。百福の會も酒よあらざれば行ふべからず。これ亦謂
君子の酒なり。世界をもて。閑居をもて。日月をもて。天日を。江海を
もて風爐とする。万民をもて客とし。乾坤を亦謂君子の茶。
應神角鹿ハ還幸して。大臣酒樂の事をもとひ。孔仁義内ハ
園をひらくて。處女茶摘歌を作る。君子ハ酒をもて胸中の磊
隗を澆ぐ。小人ハ酒をもて。洞房淫楽の媒とす。酒ハ行ふ。茶ハ
十徳あり。酒を酌で人を愛するハ仁の盃をあげて客を餐するハ信
醉て身を忘るハ勇。賓主相讓るハ礼。本性を清ぶるハ智
なり。醒て相勸るハ義なり。一世行を缺ハその本末を

未ちさまよね盃あり。特きてその人の非をきくべきば尻の居ぬ
高脚杯あり。酒筵に据えて遅く到るえれば信を失ひ碎て相撲ん
えれば義を失ひ酸て勧解るえれば勇を失ひ酷酎して相罵るえれば
仁を失ひ強て飲えとるえれば礼を失ひ酒量なくてうえれば
智を失ひ酔て誤を覚り非をあるば酒よきくのいあらむ。小人罪
なり。盃を抱て罪あり。且その咎は酒よりも。欲ものく賢愚よあり。
人悔めるえれば。ことを酒に帰せ。酒の力に免さるえれば飲ずるえれば
福あり。つとをちらざるものは改ずしてあり。ひる白物あり。醒てえらめそ
非をあるば。酒の徳なり。人その乱酒の強るをば。日くよりの非をえば。
過をふてびるものをあらじ。酒は聞よ百薬の長なり。その毒とする所
以は。火の燒水の溺ものとし。譬べ外なる飄よ。二外の酒と盛るえれば。



溢ものとつえとるり。人えくり酒量をとりそその量よりそのあるよ。
五臓よ溢ものて余を失人えり酒量をとるえれば乱ものて。乱ものるを
酒聖えと。延喜十一年。六月十五日。帝主院よ酒を賜ひ勅して二十
盃を限とと。召よ奏ずるの。僅よ八人。参議藤原仲平。兵部大輔
源嗣。右近衛少将藤原兼茂。藤原後蔭。出羽守藤原経
邦。左兵衛少補良峯遠視左兵衛佐藤原伊衡。散位平希世
ホるり。その中希世は門外よ碎えと。仲平は殿上よ。間物宿を
生し。その餘の徒もれを忘ものて。言古戸ものの。呉は北を踏ものて。伊衡
一人竟よ乱ものて。抽賞とて。駿馬を賜るり。長谷雄卿の賜酒
記よ。えるりげよ酒は量なり。呉乱るよ及ばざれ。聖人は寛ひ。
えるつくるよ。伊衡は三十盃の酒量えれるり。右よ二十盃

ゆゑ乱をなすその餘の人こゝに十盃或ハ十五盃の酒量をゆく〻二十盃を傾しかば醉て泥のごとくに酒のゑひ人の賢愚も亦如此なり。聖人ハ四海を酒そこて飲尽さゞる中乱をなさず此ゆゑ在てハその國治り家よのつてハその家整ふりその德なりして富貴ゆたかんを願ひその才なりして練を推し下賤を恥るものハ三盃の酒量をもつて百盃の酒を飲んとするが如しよや志を一時ゆ忘れ身を飲ゑをもつとも久しかるべきを乱をその醉いまだ醒ざるに死して笑を後ゆ送るを亦驚べし。且酒の利害といふ。酒ハ富人ゆ害ありて貧者ゆ利あり。富人ハ年中樽酒を貯て佳肴をもつぱ醉て房ゆ入るのみ是しかるに強酒両ながら身を傷て經命く貧者ハ酒を買ゆ或ハ一合或二合時ゆ從て又他ゆ飲ざ且酒合酒ハ淡しく久く人を醉ざるに僅ゆ酒気を帶びて布子一枚の盃をおかゝ重なり負て遠ゆ走ゆ走ゆその才を運動するゆ忽ゆ酒ゆよつて長寿をなす。されど中小人ハ使ひがたくして悅ー易しかたを使ゆ酒價をもつてを酒といふものなくんば。坂ハ明るゆ浮雲助ふ長持を舁くものもなくんば。なる布ふ下戸ハ酒の害をゆるとも酒の利をもとゆ上戸ハ酒の利をもれども酒の害をもとゆふ酒を嗜むものハその外を飲ハゞ醉と紛い寡慾なりて思慮をおさ憂を散ふ紙りて酒ふ家ゆ傷るの毒ゆまゞ中おのづから補ふとあり又酒を嗜ざるものハ傾盃息と紛るゆ醉ざる前ゆ寡慾なりて思慮を去さ憂を解ゆよりしこゝ。酒毒の害を脱るといへども。なるべく補ふ所あり。ゆまゞ飲と飲ざとハ利害相半ゆ。夫酒ハ人の大慾なり。凡夫の禁ゆ難ゆ紛れて歇る用

まづその慾を断てその利害をとくに西方の聖人のごとく淫酒を欲まざるべし。淫酒は国を警むべし。これを責るは呂害を尼夫悟ど。釈氏は淫酒の二ツを禁じて人情を情るといふ。亦選へるか。且酒は

酷くものの人その非をとる。茶は酷くものの人いまだその非をとらず。茶はえ来。貴人ごとく。貧賤の所行をとらん為の拵いなれば用推を宗とす。古器をあつめて金銭を費さん。真の茶はあらず法式は泥まず。

そも狂簡の人も。真の茶はあらず。陸鴻漸は当時茶を名づけ。李季卿が為に恥めしを。毀茶論を著して亦絶て茶をいはず。富貴の人。まく清貧閑雅の拵びをしてそ。やめづらしくもあるか。貧賤の人。貧賤の拵びをして何のあれたるあらんぬ。ひとり幼ん

ちて。富貴の拵びと羨て。斉品の茶器を飾んとするのハその害酒

よりも甚し。朝とく起て漱ぐ。晩茶の幽花を嗅くは夜せ東窓よりこそ入る。旭は向ひて一碗を喫すれば茶も又酒のごとしとめり。彼も辨ずべきなり。

乾も誉べきなり。強欲国は茶をとらず。紙の上茶を辨り。客人は酒を好まず。紙のて酒を憎む。好憎あるて相爭ふ人の公論ふ。客人酒中の数をとらば又その茶は酔ふ。嘆ずべして。

人の酒を酔さんとて。これも又酔る人なり。まづ茶は酔る紙酔

ちて人の酒を酔ーもよう。さりそは至ぬく。お暇まうしとあるんと

それば養恵兵衛は。年の暮足の端とて紙をとらず。慌忙つ。樵夫を

ひきそめて。怒懣は腰を弓め。それが眼あらるべし。豪傑をとらず。野

夫は功者のりとして。紙を忘る。礼儀無恥ふ云ふ。いまだ

たらずば高論ふるて。明の酔頓は酔ふ。抑その山は何と呼ば

ちん。先生の号も、ちょうちんとぞいひける。樵夫、これをいひて、打点既。この山は醉醒山と号して、古今独立の奇峯なり。愚なるあ醉てこの山に登れば、忽地に醒して、その非を暁る。世間の人醒てこの山に入れば、醉を復す。その楽しみを助く。これより醉醒と名のる客人ここに至りて、ことばの論の高きにあらず。山の景の奇なるを、嗚呼なるかな。おのれは舗糟間人と号す。凡酒を嗜む熱しと冷しとの間を、その方に間といひ、間は則中庸の義なり。まことに酒を好むも、醉と醒との間を楽みとして、間と名とせり。又美禄寺の僧とうみて、客人と酒茶を論ずる老人は、律園蘭叔といひ、ものの名、彼は別号を忘憂君といひ、頗大器なりしく。まことに常に欣仲間とせり。彼と、凡庸の方にまじり物の数なるべしこの



国に、古より、酒聖酒仙多し。客人を用の兵を好まば、都これらの人を笑ふべし。しかるに、ものと威されて、義兵衛にまぐれ驚きそれぞれ貪婪国へ推渡りて、亦一彼行ばやとぞ思ひくべき道をもとめ、進退こそ究りぬと、聊ば間人うち笑ひ、孟子境に入るこれ、国の大禁と問ひしに、聖人は凝滯せず、よく物と推移きて、客人強欲の国に拉ばれ、ひとりその糟を舗ひ、その醨を啜らざる。貪婪国は、これ北海上三千餘里なれば、渡海りとも容易なるべき。ものもの彼国の熊鷹、とりくこの山へ抱来る。これ物毎に搔抵なのが古巣へ入りて、もくとあり。さるほどに、慾ふかきものと熊鷹とは、貪婪国は、食奥て、絶土なる国のもの、これを彼れの熊鷹は、抵で放ちといふ。その抵なるは、一歩も労せずして速に彼地へ到らんとぞいひける。命のあるは、今

きぶとといへども果ねよ。忽地飆と羽あしたち。天狗ヤ鵬ヤ。おそろしげなる鳥翔さり。桑表兵衛をくん飛で。虚空をゆくのごとく。

○總評

世よ酒を飲で醉ざりのみ。ちろまどもいまぐ劉玄石がごとくにあらざ。醉て亦醒ざるのみ。ちろんどもいまぐ屈原が如をなんぞ。劉玄石中山の酒家よ酒を沽しとる。主人千日の酒をもて醉を家よ放まバ死ぬが如しその家竟よれを葬る。後よ酒家のあるじ。日を揣りそのれてこまを入まバ。三年以前よ葬るといへ。驚きてその故を告。墓を發き棺を開げバ。玄石欠伸して初て醒ぬ。その棺を開くそれ。酒気よ打まて醉りの。亦百日起とといへり。搜神記 又楚國の屈原ひとり醒ぬ。楚の君臣をも醉ぬ





亦屈原を容まとど。屈原既よ放まて。江潭よ抱び。ものく澤畔を吟ぜて。顔色憔悴。形容枯槁ぬ。漁父ぬまとて。説諭せども聽ざ。遂よ汨羅よ投りといへ。後漢書 夫中山の美酒。千日玄石を醉して。玄石を殺さざ。楚國の濁酒。一旦屈原を醒して。屈原を殺ぬ。その亦よ一人まづ醒人ぬ。衆人の醉ざるあれども。醉ざて醒んるのいと難ぬ。醉て以へまるのあり。醒て測へ投むのぬ。その紙り 屈原が如ぬい稀ぬ。